



平成27年度
会報第1号

発行・編集

鹿児島県教頭会

〒892-0836

鹿児島市錦江町2-16

鹿児島県公立小・中学校

教頭会会館県教頭会事務局

TEL 099-226-8268

FAX 099-822-5580

会長就任のあいさつ



鹿児島市立福平小学校
会長 永峯 光朗

去る五月八日に開催されました県公立小・中学校教頭会委員会において承認をいただき、会長に就任することになりました。責任の重さを強く感じつつ、微力ではありますが、精一杯取り組んでいきたいと思っております。皆様の御支援と御協力をよろしくお願ひ申し上げます。

本年度の県教頭会会員数は七三三人、うち新任の教頭先生方は七八人です。学校の統廃合等の影響もあり、近年会員数は減少傾向であります。そのような中、本県の教頭会の運営態勢や研究大会への取組等、他県から多くの評価を受けています。このことは、これまでの積み上げと新しい視点

での改善が加わり、それを検証しながら年次ごとに見直していく中で、つくり上げられた結果だと思えます。それが、学校や地域、児童生徒に還元されているものと確信しております。

教育を取り巻く社会情勢の急激な変化の中において、私たちが教頭は、時代の要請や国の動向を把握しつつ、「教育の不易と流行」ということを決して忘れず、取組を進めていくことが大切だと思っています。私が考える「教育の不易と流行」とは、常に子ども第一で考え、一人一人の子どもに『夢と憧れ』を持たせることだと思っております。

今年度の研究は、全国公立学

校教頭会第十期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」の二年目にあたります。初年度において明確になった研究指針や、全国大会の研究成果と課題等を基に、教育界の動向を踏まえ、時代の変化に対応するように新たな視点も盛り込まれています。私たち教頭は、「職能研修団体」としての職務の専門性を高め、幅広い教育課題に対応できる力を身につけていかなければなりません。今年度は更に相互の連携を深め、課題解決のために頑張っていこうと決意を新たにしています。

そこで、本会では次のようなことに重点を置いて進めて参ります。

第一に、第四九回研究大会（第五五回九州地区公立学校教頭会研究大会）で得たものが、会員の皆さんにとって何か一つでも、それぞれの学校で活用できるものであったらと考えています。地区の組織や研究体制が昨年度から変わり、委員・代議員、研修部長、提言者の方々は大変な御苦労だったかと思われまふ。日々職務を遂行しながら準備していただいた研究発表は、携わった教頭先生方の努力の結晶だと思っております。

第二に、全国大会や九州大会、各種研究会への積極的な参加を通して広く情報を収集し、県教頭会ホームページの充実を進めたいと考えています。幅広く情報提供を行うことで、会員同士の更なる連携促進に繋がると思っております。

第三に、教頭の処遇改善に向けた調査活動に努めるとともに、県教学校教頭会等の各種団体と連携を強化し、要請活動を進めて参ります。

第四に、今年度の研究大会九州・鹿児島大会の反省に立った取組についてです。今年度は本県で九州地区公立学校教頭会研究大会が開催されました。本県以外からも九州各県からの提言があり、充実した研究

大会となりました。大会の反省を生かし、九州各県教頭会と継続的に打合せや協議等を行うとともに、本県各地区の委員・研修部長・提言者の皆様と連携を深めながら進めて参ります。最後になりましたが、様々な難局を乗り越えるためには、教頭先生方のこれまでの経験と建設的な意見がより必要だと考えております。

県教頭会は、今後も広く会員の皆様の声を聞かせていただき、それを生かしながら相互の連携を深め充実した活動を進めていきたいと思えます。平成二十七年の各学校における教育活動及び県教頭会研究大会が順調に営まれることを祈念申し上げます。就任のご挨拶といたします。



随想

「地域に根ざって」
横川町立横川中学校
小磯竜一郎

この2年余り、定期的に運動を続けている。おかげで、「体脂肪5%・体内年齢36歳、四代目SoulBrothersを目指している小磯です。」という自己紹介が、最近のわたしのあいさつ(掴み)の定番になっている。

運動の内容はというと、ランニングと筋トレ、そして週1回のフットサルの練習である。そもそものきっかけは、来年度の部活動顧問をどうするかという心配からであった。当時、本校にある女子駅伝同好会の顧問が異動対象だったため、次の顧問は？と考えた。そして、うまく割り振れなかったら最終的には自分が引き受けねばならないか…という思いに至り、ならば走ってみるか、ランニングを始めたのだった。それからしばらくして、身体が少なくて来たかなという頃に筋トレも追加したのだった。

今ではこの努力が、町内の職場・職域駅伝大会や地区対抗駅伝大会に出場するなど、地域貢献に役立つようになった。

またフットサルも、地域に密着しようとの思いから、経験もないところに教え子のツテで町内にあるサークルに参加させてもらって毎週練習に出かけている。小学校のスポ少の保護者を中心となって立ち上げられたサークルだったので、小学校の保護者とも顔見知りになり、ひいては本校の保護者ともつながりが深まり、小学校の情報や保護者の思いを聞く機会が増えた。また、これまで顔をあまり見なかった保護者もPTAで見かけるようになった。本校での勤務も3年目、本職も12年目。これからの地域に根ざし、子どもたちのために尽くしていこうと思う。

私の勧める一冊の本

木のいのち木のころ

天篇

著者 西岡 常一

発行所 草思社

鹿屋市立小中一貫

花岡学園花岡中学校

茂岡 泰弘

木造の建築物では、世界最古といわれ、千年以上経った今でも美しい姿で人々を魅了する法隆寺。その修理・復元に一生を捧げた宮大工、西岡常一氏の口述書である。棟梁として法隆寺や薬師寺といった名だたる寺院の復興工事を成功させた華々しい活躍の裏にある厳しい徒弟制度の生活や飛鳥の時代から宮大工に伝えられている口伝の内容が中心となっている。また、「学校や今の教育は違いますな。」「こうしたことは学校や本では学べません。」など、時折出てくる学校教育との比較や批判めいた言葉もなぜか心地よくおもしろい。

この本との出会いは、校種も変わり学級経営が全くうまくいかずに悩んでいた2校目で、ある先輩先生からの勧めであった。その頃、草花や盆栽等に興味もなく、あまり気乗りもしないまま読み始めたのだが、今ではちよつとした時に、ふと読み返す心の一冊になっている。お陰様でその後の学級経営や部活動指導、そして教頭になった今も大きく役立つている。

本書の中に「塔堂の木組みは寸法で組まず木の癖で組め。」という口伝が出てくる。癖と個性を排除するのではなく、生かし組み合わせること、時代を耐え抜く法隆寺のような建造物ができるといふことだ。私は今、小中一貫校で右往左往の毎日を通じている。職員室では小学校と中学校の先生方が入り乱れ、半ば異文化の衝突と融合を繰り返しながら開校三年目を終えようとしている。隣に座る小学校教頭もなかなかの癖

と個性を發揮している心強い存在である。まずは教頭同士、しっかりと組み合い、そして、負けず劣らずなかなかの癖と個性を發揮している素敵な職員とともに、後世に受け継がれる学校文化の醸成を目指したい。決して耐震偽装や手抜き工事の誘惑に負けぬよう。

いのちのバトン

著者 相田みつを

大和村立大柵小学校

田島 正英

この本との出会いは今から十年前。初めて六年担任を任せられ、希望に胸膨らませ張り切っていた。しかし、実際スタートしてみるとうまくいくことはかりではなかった。思春期にさしかかった児童は些細なことで対立することがしばしばであった。学級の問題として取り上げ、何度も話し合いをもった。そんな時、担任していたある児童が熱心に読んでいたのが、「いのちのバトン」だ。この本は、相田みつをさんの詩に、童話作家の立原えりかさんが創作物語を添えた

ものである。私は、早速書店でこの本を購入し読んでみた。相田みつをさんの詩が立原えりかさんの創作物語によって引き立てられ、より身近なものに感じられ、私の心にスーッと入り一気に読み上げた。私は、その中の一つの詩「セトモノとセトモノとぶつかりこすると

すぐこわれちゃう

どっちかやわらかければ

だいじょうぶ……」

を教室に掲示し、立原えりかさんの文章を見童に紹介した。

教職に就いて二十八年。

これまで、何度か「もうだめだ」と挫折しそうになったことがある。学級経営のこと、保護者との考え方の相違、職場の人間関係など、自分は一生懸命やっているのにどうして……という思いでいっぱいになり、どうしようもなかった時に救ってくれたのがこの本である。「だれかをしっかりと包んでくんで、傷つかないように守ってあげようとする思いやりが、やわらかい心なんです。自分はくしゃくしゃになりながら

だれかを守る、とても難しいことだけど、『そんな人になりたい』と願うだけでも、優しくなれそうです。」という立原えりかさんが書いた一節は、読むたびに私の心を解きほぐしてくれる。私はこれまでに何度この本を読み返しただろうか。他にも数多くのメッセージがこの本には込められている。私は、これからもこの本を自分の近くに置き、行き詰まった時は何度も手に取ることでだろう。まさに、私にとってかけがえのない一冊である。

自由投稿 「朝の清掃」

中種子町立油久小学校
野口浩二

朝、子ども達のボランティア活動で一日が始まる。校内の清掃は子ども達に任せて私は、旧校門とその周辺の落ち葉の清掃に取りかかる。ここは唯一、学校の樹木が地域に葉を落とす場所である。

清掃を始めると気になることが出てきた。それは、毎日同じ場所にたばこの吸い殻が何本か落ちていくこと。「たばこのポイ捨ては止めましょう。」マナーの悪い大人に「子ども達の通学路だぞ」という気持ちで、看板でも立ててやろうかと思うくらい腹立たしい気持ちになっていた。でも、看板を立てて訴えるのは簡単なことであるが、せっかくなので始めた清掃。この人が、「ここはいつもきれいに掃除されているな」と

気が付いてくれるまで毎日頑張ってみようと思った。私の思いが届いたかどうかは分からないが、全く落ちていない日が何日も続くようになってきた。

清掃を続けてもうすぐ三百日ぐらいいなる。今でもたばこの吸い殻は時々落ちていて残念な気持ちにはなる。ただ、地域の方々から声をかけてくれるようになり、たくさん元気をもらえるようになったことが今は、とても嬉しい。

新任 教頭 雑感

「感謝そして謙虚に」

薩摩川内市立海陽中学校
永吉浩幸

本校は、昭和五十五年四月に手打中と子岳中が統合して設立された学校で現在生徒数は二十八名である。甌島列島の最南端に位置し、多くの自然や植物、生物に囲まれた環境豊かな地域である。

四月に温かく迎えられ「頑張ろう」と思ってから七ヶ月過ぎた。現在もその気持ちで過ごしている。赴任すると前任の方が、この順にやっていけばいいと四月初めの校務の準備をしてくださっていた。校長先生からも適宜指導して頂いた。校長先生の指導助言や前任の方の引継のおかげでスムーズにスタートをきる事ができた。周りに感謝するばかりである。十分な引継がでなかったのではないかとふと自分の前任校のことが頭をよぎり反省した。自分も仕事で感謝される人にならなければとあらためて感じた。

昨年七月に、ハンドボールの審判で上級資格を受験した。その際に日本協会審判審査委員長からこのような話があった。「仕事も審判も同じである。審判の姿には仕事の様子が

表れる。丁寧に誠意を持って審判にあたるように。普段の生活をしっかりとしなければ受検しても無駄。上級になればなるほど謙虚な気持ちが必要で、そうならなければ審判をする必要はない。」資格受検に行ったが、仕事観についても教えられた感がした。その後、この言葉は自分の頭に中に残って仕事にあたっていている。たかが審判かもしれないが、人生のヒントはどこにあるか分からないものである。常にアンテナを高くし、自分を高められるようにしていきたい。今後も謙虚な気持ちを忘れることなく明るく元気よく校務にあたりたい。

